艦隊これくしょん―詭道の兵―

はまっち

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人類が世界の７０パーセントを失った後。

残された人は静かに反攻の刃を研ぎ澄ませていた。

「……だから、雨は嫌いなんだ」

これは、〝正しくない〟人のお話

目次

00 砲火の中に 1
01 戦に備えよ 5
02 泥濘と共に 9
03 不慮を崇れ 12
04 伸るか反るか 16
05 眠る草木と 20
06 嵐に踏み込め 24
07 警報装置 28
08 誰何の夜を 32

００＿砲火の中に

夜闇を切り裂くように、爆炎が迸った。
ガソリンのぶちまけられたようなどす黒い液体、誰のものともしれぬ赤い血、緑に芽吹いていた草木……。全てを巻き込んで、炎は舌を伸ばす。
「第２班！　そっち行ったぞ！」
「第１班了解！　なんとしても足止めしろ！」
だかだかと銃弾をたたき込む音。倒れる樹木。転がり落ちる薬莢。再び爆ぜ散る血肉。そして、蠢く巨体。
ここは既に、戦場だった
「有効弾着見えるか!?」
「７．６２ｍｍならなんとか怯む！　それ以外は軽すぎる！」
「ふざけるな！　７．６２ｍｍ一杯どれだけかかってやがると思ってる！」
炎に照らされた奇っ怪な樹木の群れ。その⊠からまた、ドラムでも鳴らすかのように銃声が飛んでいく。
男はただただひたすらに引き金を絞り続けていた。
そこは小さな窪地のようになっている草地だった。木々の生い茂る上の方から、背丈の低い草で覆い尽くされた下の方と連携して窪地内に敵を誘い出して、それを撃つ。簡単に言えばそれが作戦だ。
――いや、作戦だった。
「止まる気配はあるか！」
「全くありません！　こいつ、銃弾が効いてないんじゃないのか!!」
結果的に、窪地への誘因は成功した。
誤算は、敵が作戦をぶちこわすほどに強大すぎた。と言うことだけだ。
黒い体が前進する。それだけで背の低い叢が地面ごとえぐれて、そこにふせていた者の断末魔を撒き散らす。
「くそったれ……いい加減に倒れてくれ！」
そのとき、じろり。と、どこかからかねめつけられた気がした。

ぞくりと背筋に悪寒が走り抜ける。ほとんど反射的に、脊髄の命ずるまま地に伏せる。

刹那、咆哮。

草むらの中で弾かれ続ける銃弾を浴びるだけだった黒い生物が絞り出すかのように、空へと大きく吠えていた。

とたんに耳を塞ぎたくなってしまうほどの不協和音が響き渡り、それ終わったかと思うとその大きく開けられた口から、ガシャリと細長い筒のようなものを突き出した。

「……っ」

男にはそれが、戦艦かなにかの砲のように錯覚してしまって。

「その場に伏せ！　その場に伏せて対爆防御体勢!!　早くしろ！」

近くでバナナ型の弾倉を銃身にたたき込んでいた歩兵のヘルメットを押さえつけながら、そう叫んだ。

伏せたまま横目で見てみると、草葉の陰で身体を丸めて、耳を塞いで、口を大きく開けた対爆防御体勢を整えているものが見えて、ほっと一つ安堵のため息をついた。

直後、轟音。

ぱらぱらとなにかの粉が降り注ぐ中、がばりと跳ね起きて状況の確認を急ぐ。

窪地の中を見ると、そこは死屍累々であった。

誰の手か誰の足かも解らないような肉片が散らばって、綺麗な死体も対爆防御体勢にしくじって目玉の飛び出たグロテスクなものばかり。

さらに、お椀でいうところの壁の部分が、おおきく陥没していたのがよく解った。

何か弾体でも撃ち込まれたとおぼしきそのクレーターをみて、男ははっと先ほどの砲口を思い出す。

「対戦車火器（RPG）あるか!?」

再びあれを撃たせてはダメだ。そう直感で悟った男は敵から見つかるリスクを恐れずに声を張った。少しもしない間に、反対側の木々の隙間から懐中電灯がゆらゆらと揺らめくのが見えた。

「こっちに引くぞ！　第２班、撃ち方止め！　第１班、３０秒間突撃破砕射撃！」
男が声を張る。その後ろで、伝令がちかちかと発光信号を送ってより確実に意識を伝達する。
片側だけが静まりかえり、もう片側がよりいっそう輝く。跳ね上がる銃口が光をきらきらと煌めかせた。
男のもつＡＫ７４―Ｕも、炎に照らされて耀く薬莢をばらばらと吐き出しながら、敵の黒い身体をめがけて飛んでいく。
誰かの撃った弾のうちの数発が、運良く緑に耀く水晶玉のような目玉を掠め、それに反応したのか、ゆったりとした動作で下腹部の灰色の腕を動かし、男たちの方をにらみつけた。
「今だ、撃てッ！」
自分の弾倉が空になって、次のマガジンと入れ替える丁度のタイミングで叫ぶ。
男の反対側の木々の⊠から一際大きな光が噴出されて、眼前の怪物の身体を背中側から強く押し、くの字に曲げさせた。
「やった！」
先ほどヘルメットを抑えた歩兵が小さくガッツポーズをとりながら叫ぶ。
が、もうもうと巻き上がる土煙が収まると、そこには背中に小さくない傷を負いながらもなおも立ち上がろうとする怪物が見えた。
よだれのようにだらだらと口蓋からこぼれ落ちる黒い液体は、無念の感情を表すようでもあって。
「……宇治さん、さすがにもう撤退しねえか！　奴ももはや長くはなかろ！」
そのとき、眼下に生い茂る茂みの中から、声がした。
擦り傷だらけで、今までよく生き残ったものだと賞賛したいほどの負傷。
男は、宇治はふむと顎に手をやって考え込んだ後、こくりと頷いた。
「総員撤退！　ひけ、ひけ！　撤退開始！」
その号令で、がさがさと音を立てながら男たちは撤退していく。

しかし宇治は、ふと思うところがあって、窪地のお椀のような形をした壁を下って、怪物の前まで来た。
「引導は、渡しておいてやろう」
黒い皮革の奥からどくどくと黒いオイルのような血液をたれながしつづける怪物に、そう呟く。
黒くてごつごつしたその皮に手をやる。どくんどくんと鼓動する音が手のひらを伝わってきて、こいつも生き物なのだなと物思いにはせた。
水晶みたいな眼球が、ぐりんと憎々しげに動いたような気がしたが、気にしないように目をそらし、真っ黒い皮の裂け目に銃剣と銃口を突っ込んでからパンと一つ。打ち込んだ。
怪物はびくんと一、二回痙攣したが、それきり水晶玉みたいな眼球を濁らせて、おしだまる。
それをみた宇治は、ふうとひとつ漏らして額の汗をぬぐった。
「さて、俺も早く帰らないと……」
ふと鼻につく臭いを感じて、目を開ける。すると、先ほど死んだはずの怪物からガスか何かでも抜けるように得体の知れない気体が吹き出しているではないか。
それとどうじに、風船のように怪物の身体がしぼんでいき、ドライアイスの煙のようなものが噴き出始めた。
それが終わった後。
「……なんだ、これ？」
そこには、一人の女がいた

01　戦に備えよ

宇治は防弾ベストをはずすと、どさりとコンクリートの硬い床の上へと放り投げた。
そしてそのうえにバンダリアをなげて、さらにその上にそっと銃を横たえる。
胸ポケットから日の丸のように見える大きな赤丸の描かれた柄のたばこの箱を取り出すと、その中から一本抜き取って咥えた。
「……」
ベッドの縁に腰を下ろしたまましばし呆然とした後、火のついていなかったことを思い出してオイル式のライターを取り出す。
「……で」
ふうとひとつ紫煙を吐き出してから、誰に言うわけでも無く漏らした。
「こいつをどうするか。だよなぁ……」
ちらりと横を見る。
正確には、横でぼろっちいベッドに寝そべって幸せそうに寝息をかいている少女を。である。
はあ。大きくため息をついてから、また紫煙をくゆらせ始めた。
「どう説明したものか……」
怪物を殺したらなぜかいた。なんて話すと狂人扱い待ったなしである。
「どう扱ったものか……」
血気盛んな野郎連中ばかりのここで、少女が一人いる。すると事が起こるのは必然である。
「なんで持って帰ってしまったんだ俺は……猫を飼うって話じゃねえんだぞ」
思わず頭を抱えた。がしがしと髪を掻き毟り、はあとまた大きくため息を吐き出した。
そのまま再びたばこをくわえ直すと、呆然と遠くを見たままもう一つ、おおきく紫煙混じりに嘆息した。

「……ごほっ」
すると、少女が苦しそうに咳き込むのが聞こえた。その咽せる声にはっとなり、ぼそりと申し訳なさそうに悪かったなと呟いて、携帯式の灰皿でタバコの火を消してやる。
寝ているとはいえ、女子の前でタバコを吹かすのはさすがにデリカシーも思いやりもくそもなかったか。
「……寝てるか？」
ふと気になって、少女の方をみた。
セミロングの黒い髪に、黒いセーラー服をまとった彼女。控え目に見ても比較的無くはなさそうな胸の膨らみとやわらかな腰のラインが嫌でも女性であることを認識させられ――
「……待て待て、とりあえずは落ち着け」
予期せぬ女っ気に少々混乱しているようだ。
そう結論づけた宇治は少し夜風に当たりに行こうと部屋の出口へと歩き出した。
「宇治さん！　いらっしゃいますか、宇治さん！」
「どうした？」
すると、丁度良いタイミングで下から階段を駆け上がりながら呼ぶ声がする。
「またあの黒い奴が。さっきの死に損ないの仲間かもしれません！」
火急の件のようで、時々に口ごもりながらも伝令は語ると、すぐに集まるようにと口伝てたあとどこかへ走って消えていった。
「どうした、ものかなぁ……」
ＡＫを取りに行く時間が惜しいと思った宇治は、とりあえずホルスターに一丁拳銃があることを確認して、そっと部屋を抜け出した。

宇治が廃ビルの外へと飛び出してみると、幾人もの武装した男たちが待ち構えていた。
先ほど伝令で来た男が前に出ると、宇治に叫ぶ。
「宇治さん、あの黒い奴がここを目指して近づいてきてるらしいです、

どうすれば!?」
「……詳細な情報を言え」
　大の男がそろいもそろってこの体たらく。腹立たしげにひとつ吐き捨てると、比較的若いその若者は焦ったように報告をまとめ始めた。
「えっと……距離はだいたい西に５００程。あいつの歩きぶりからすると、１時間と半分ほどでここに」
「まだ使える奴らはどこにいる?」
「とりあえず、病室代わりの部屋以外から叩き起こしてきた奴らはこれで全員です」
　じろりと睨みつけるようにして広場を見渡した。
　各々に銃を手にしたがたいのいい男たちが、そこここでたむろしているのが見えた。
　ちっと舌打ち。今回の戦闘では確かに犠牲は大きかったが、無傷の野郎どもが１０人もいないなんて事は無いだろう。
「無事な奴らはおおかた、ここに帰る前にどこかへと逃げ出してまして……」
　敵は強く、時間は足らず、士気も低い。しかもこちらには人手も足りない。
　頭が痛くなってくる話だ。
「とりあえず、７．６２ｍｍ以上を持ってる奴は挙手」
　緑に浸食されたビルの合間に開けた土地で炎を炊く彼らのうちの半分ほどが手を上げた。残りも西側のそれなりの銃で、けして拳銃一丁と言うことは無かった。
　今回当たってみて解ったが、黒い怪物に対しては貫徹力に優れる７．６２ｘ３９ｍｍ弾でも少し怯むくらいで殺せはしない。
　つまり、対戦車兵器が必要だ。
「……ＲＰＧは後何本ある」
「えっと……２本ですね」
　ＲＰＧ―７はこのご時世でなくても仕入れが難しい。それは解る、解るが。

「……使えないな」
「あ、すみません……」
ぼそりと毒づいた宇治の言葉に、隣に立ってあれこれ説明していた若者がじぶんのことのようにとらえたのか軽く頭を下げる。
「擲弾筒や手榴弾。その他対戦車兵器は？」
「Ｍ６７（アップル）とＦ１（レモン）がそれぞれ２５個ずつあるらしいですけど……」
帳簿通りにあるとは限らないのが、非正規部隊の辛いところだ。そういわんばかりの恨めしさを込めて、若者は宇治を睨みつける
「あ、あと、Ｃ４が……ここを一つ吹き飛ばせるほどなら」
それでもあるだけましだ。宇治はニヤリと口角をつり上げた。

０２＿泥濘と共に

気味の悪いほどに静まり返った夜のジャングル。熱帯地方特有のいやに湿って生ぬるい風が、背の高いイネに似た植物の中に伏せている宇治たちの頬をなでていく。

古い田んぼが荒れ果てたらこうなるだろう。と言われても不思議ではないくらいに荒廃した泥濘の湿地帯。低湿地独特のマングローブが遠く夜のとばりの中に浮かび上がって、否が応でも泥まみれの彼らの姿を自覚させる。

「……人事を尽くして天命を待つ。か」

宇治はＭ１４の二脚を立てて、ぬかるんだ地面の上に置いた。

もはや濃緑の迷彩服は泥だらけ。むしろ蛭にかみつかれていないだけましだと思えてくる。

「本当に、これでいいんですかね……」

隣に伏せた若者が、疑念たっぷりに尋ねた。

「なにがだ？」

「いや……ＲＰＧ一本無いのに、あの怪物を倒せますかねって……」

そわそわと不安げに鉄の輪っかのついた筒状の物を弄ぶ若者から、最終確認もかねてその筒をひったくる。

塩ビのパイプみたいにすべすべとした円筒。その片側に大きく鉄の輪がくっついており、まるで防犯ブザーかなにかのようだ。

「まあ……それに賭けるしかないな」

ちらりと円筒から地面に向かって伸び出た赤いコードを一瞥して、ぽいと若者の方に投げよこした。

若者はそれを慌てた動作で受け取り、宇治を恨めしげな眼差しで睨みつける。

しかし。

宇治は静かに顎に手をやった。ぞりっとした無精ひげの感触が指に突き刺さる。携行型の双眼鏡の向こう側を覗いてみるが、視野の大半を叢に奪われている上に辺り一つ無い真夜中。草木も眠る丑三つ

時と本土の方でも言われているとおり、木々のざわめき一つすら起こらない漆黒の闇の中、だ。
問題は多々ある。
このままじっと闇を睨んでいても、双眼鏡から覗く中に不安が見え隠れしてしまうようで、そっと双眼鏡の縁から目を離した。
牽強付会、楽観視。脳裏にぐるぐると回っていた文字列がすっと闇に溶けていく。じめじめとした居心地の悪さが、逆に宇治を現実へと引き戻した。
「……大丈夫だ。人類はまだ負けてない」
そうやって自らを励ますことしかできないこの体たらく。拳を握りしめる右の手にも力が入ってくるのがよく解った。
「宇治さん、あれ……」
とんとんと横から肩をたたかれる。若者が藪の向こう側を指さしてなにかいっている。宇治は促されるままに双眼鏡を手にとって遠くを見据えた。
萱によく似た雑草の間から見えるのは、ちかちかゆらゆらと瞬きながら揺れる灯。ある一定の規則性に従って瞬く灯火は、人口的な青白い色のＬＥＤライトのようだ。小さな喧噪も同じく聞こえる。
「……誘因は成功とみて良いか」
ふう。と一息ついた瞬間、変な形に折れ曲がった樹木たちの群れが、ざわざわと風に巻かれてさざめいた。
途端に空気がまるまる入れ替わったかと錯覚するほどに重苦しく変質する。
若者が息を飲むのが暗闇の中でも手に取るように解った。
「来たか」
そう誰に知らせるでもなく呟いた瞬間。
バキバキボキリと音を鳴らしながら柏の木のような大木が、根元からへし折れていった。
漆黒のとばりよりもなお黒い、巨大な魚じみた怪物。
しかし、以前戦った個体よりも縦に長く、全体的に小さく纏まったような印象を受ける。

魚が陸に上がるために無理矢理生やしたかのような印象を受ける細い前脚が黄土色の泥濘を踏みしめる。
そのとたん、ズシン。と空気が震えた気がした。ズズッ、と泥が震えた気がした。
「……っ」
若者が威圧されたように息をのむ。Ｍ１４のハンドガードをつかむ手が汗ばんでいくのがよく解る。
あと数歩も歩けば、『仕掛け』に当たる。
その時が奴の最期だ。
「……今だ！」
宇治がそう喉を震わせた直後。
若者の手の内の円筒から、金輪が地面へと放り捨てられた。

０３＿不慮を崇れ

若者がピンを抜く。金輪が地面に落ちる。それがスローモーションみたいにゆっくりと黄土色の泥濘へと近づく。

それを視界の端で睨みつけながら、宇治はＭ１４のハンドガードから手を離す。すぐさま手のひらを耳元に持っていって、しっかりと抑えつけた。

瞼を閉じて口を大きく開く。そうでもしなければ、爆発の衝撃波に人体が耐えられない。

伏せた草むらの中で、宇治はにやりと自身の口角が吊り上がるのに気付いた。

特定の地点に標的を誘導。そしてコード式の信管をつないだＣ４を手動で起爆するなんていう原始的きわまりない即興の機構でも、うまくはまってくれたからだ。

丁度今時分、Ｃ４は怪物の大顎のように見える外殻の丁度真下にある頃だ。大量の爆薬が一気に発破をかけると、いくら硬い外殻をもつ怪物だってひとたまりもあるまい。

爆発でくたばってくれれば万々歳。爆破したその時点では倒すことができなくたって、動きが止まった隙に誘導要員と共に囲んで射殺すれば良い。

そうほくそ笑んで、来たる爆轟に備え瞼をぎゅっと閉じた。

「……あれ？」

若者の素っ頓狂な声。そしていつまで待てども来ない爆風。

そっと目を開ける。爆発はない。ずりりと近くで泥の蠢く音。

怪訝になって若者の居るはずの方向へ首を捻った。

「おい……」

若者は、きちんとピンを抜いていた。

信管をきちんと刺したのも、確認した。そのはずだ。

「……なん、で」

青い顔をした若者の手から、ぽろりと起爆装置は転げ落ちる。それ

は一直線に草の上に向かって落ちた。
草ががさりと鳴く。ぐりんと黒い怪物の瞳が回って、緑色の１つ目を若者のほうに向けた。
「まずっ……!!」
宇治はとっさに起き上がって左方向に飛ぶ。足のバネをフルに使って、泥へと転がり込んだ。受け身もなにもとれずに湿地を転がる。
予想が正しければ、あれは――
「逃げろ、早急に！」
きょとんと何のことか解らないような顔をした若者に向かって、大声で怒鳴りつける。同時に、怪物の側面に向かって走りだした。
「う、宇治さん!?」
「死にたくなければ走れ！」
そう言ったところ、慌てたようにがさがさと遠くの方へと草が鳴くのが解った。
そっと一安心したのもつかのま、怪物は甲高い声で絶叫する。ピンと張り詰めていた空気が震え、肺を押されて息苦しさすら覚えるほどの緊張が走った。
「やはり……っ！」
耳を抑えながら、宇治は一人呟いた。絶叫の切れ目に、ガシャリと機械的な音を立てながら口蓋を大きく開ききって細長い筒を二本、まるで牙だとでも言うかの如く闇に向かって突き出す。
こいつは、窪地で戦ったあの怪物の仲間のようなもの。ならば――
『『咆哮』の次に来るのは、『砲撃』か!?』
刹那、息を全て叫びに変えて吐ききった喉を、轟音が焼いた。
眩いばかりの閃光が視界を覆い、強烈な熱のために刺すような痛みが咽頭を押さえつけ、唾液を皆どこかへと消しとばしていく。
「……っ」
痛む喉を上から手袋を填めた右手で押さえた宇治は、Ｍ１４の銃身をがっしりと引っ掴んで草むらから思い切りよく飛び出した。
それと同時にさっきまで若者とともにいたところを一瞥。草の少

し奥に伸びていた大木が、真ん中からへし折れて燃えているのがわかった。
仮に砲弾だとして、着弾点が燃えているということは榴弾だろう。そう心の中で確認したとたん、ぞっと背筋に冷たいものが走る。もしも逃げていなければ。とおもうと心臓が凍り付いたように固まってしまう。
「……宇治さん、俺は!?」
「誘導の奴らに攻撃指示！　急げ！」
どこかに隠れていたらしい若者が飛び出してきて、指示を仰いだ。
よし。とひとつ頷いて、暗闇に向かって走って行く若者を見守る。
「……さて」
Ｍ１４の安全装置を外して、怪物と相対する。銃を擬した宇治を、碧玉のような１つ目がギロリと睨む。怪物は微動だにする事も無いまま、カタカタと音を立てて口内の砲を小刻みに動かした。
ズシン。細くアンバランスな前脚が泥に埋まる。ズリッとすべるようにしながら腹を冷たい泥にこすりつける。
歩くたび、滑るたび、微細な振動が足下から腕を震わせた。心底底冷えさせるような怖さがそこにあった。
「……っ」
恐怖に耐えるように唇を噛み締めて、思い切り引き金を引く。重い発砲音が響いた後、もう一度。
跳ね上がる銃口を抑えるのとほぼ同時に７．６２×５１ｍｍ弾が怪物の頭部に着弾する。がいんと金属の鎧かなにかにでもはじき返されたかような嫌な音を撒き散らしてどこかへとんでいった。
やはり外殻にはさして効果がないか。ちっと舌打ちして箱形の弾倉を腰ポケットから取り出すと、空弾倉を逆側のポケットへと突っ込む。
２つ目の弾倉を銃の機関部にたたき込み、緑色に光る単眼を狙い澄まして、撃つ。
黒い外殻に覆われた身体よりは眼球に射撃するほうが効果的なようで、時折金切り声を上げて身をよじらせるように。遠くでざわざわ

と喧騒が、銃声の合間にさざめくようにして耳に入ってくる。
「援護射撃まだか!?」
しびれを切らして叫ぶと、もうしばらく待ってくれ！　と聞こえた。いい加減にしてくれ。こちらだってもう弾がつきそうなんだ。怒号を発しながら宇治は再び黒い怪物の口蓋がぎちぎちと生々しい音を発するのを耳にした。みると2本目の砲らしき棒がこちらのほうをにらみつけているではないか
「くそったれ！　戦車か何かでも相手にしてる気分だ!!」
その瞬間、がちんという嫌な音を残して銃声が止まる。引き金を引くという行為すら忘れて、その状況に目を見開いた。
――排莢不良（ジャム）かッ！
M14を肩から掛けたスリングごと外して地面に向かって放り捨てる。それと同時に右足でぬかるんだ地面を勢いよく蹴りこみ、冷たい湖沼の泥の中へをダイブする。
瞬間、轟音と熱線が宇治の耳を焼いた。鼓膜がいかれたようで、何とも奇妙極まりない痛覚を残しながらだらりと耳から何か暖かいものの流れ出るのを座して待つしかできない。
冷たい泥が顔中のいたるところに塗れる。爆風とともに目の前の泥を跳ね飛ばしながら上から何かが降ってきた。見ると、つい先ほどまで使っていた銃の機関部と見られる機械の破片だった。
危なかった。今日だけで何度目かもわからないほどに安堵したのもつかの間、今度は怪物をはさんだ反対側の森の中で蛍のような光がちらついたのが見えてしまう。そして、ほぼ同時に撃てと若者が叫ぶ声も。
――馬鹿野郎、俺がさっきの砲撃でくたばっちまったものと見てやがる!!　そう叫んだ罵声は、圧倒的過ぎる大音量の銃撃に巻き込まれて消えていった。

０４　伸るか反るか

「……っう」

頭がクラクラする。がんがんとドラム缶か何かでもぶん殴り続けているかのような圧倒的な爆音。

スネアドラムを思い切り何も考えることもなく打ち鳴らしたときみたいに、やかましいというしか表現のしようがないほどの銃声の束が、破れた鼓膜を通り抜けて直接脳髄に音波で殴り込みをかけてきているかのようだ。

宇治はそこで、はっと目を見開いた。なぜ俺は生きている。友軍からの誤射で死ぬはずではなかったのか

泥でまみれた手袋を、二の腕から手のひらに向かっておもむろに力を入れることによって泥を握り締めるかのように動かした。きちんと動き、感じ、しっかりと生きている。いったいどうして。

「……そうか」

蛍の光や星の光が闇夜にきらきらと煌くように、草むらのいたるところから曳光弾が射出されてはどこかで跳ね返る。黒い巨体ががいんごいんと鈍い音をその強硬な表皮からはじき返しながら、その短い首をもたげているシルエットが発砲炎の中に浮かんだのがよくわかった。

偶然にも俺をかばうような体勢になっているのか。宇治はその幸運を喜びながら、頭の中で策を練る。

今現在、〝怪物〟は誘導要員のほうに注意を向けている。ここでできることは二つに一つだけだ。

それは即ち、合流するか、否か。

少しだけ考えた後、宇治は一人、泥の中ゆらりと立ち上がった。

音を立てないようにしながら向かうのは、泥にまみれた粘土爆弾[C4]のもと。薄暗い記憶を頼りに、暗闇を這う。

何度も何度も訓練した第五匍匐前進。腕の力だけで泥の中を泳ぎ、胸ポケットから拳銃の９ｍｍ弾倉を取り出した。

すぐ後ろの怪物が悲しげに絶叫をあげる。宇治のすぐ右手に弾き

返された水柱が上がる。
ざわざわとがさがさと喧騒が森を駆け巡り、直後の一瞬の空隙を縫うようにしてまた、怪物は砲撃と呼ぶべき攻撃を行った。
衝撃波が背中をあぶっていくが、1回目や2回目と比べて体勢が低いことから、特に被害はないと言ったところか。
再びだんだかと単発的に起こる銃声の中をすこしずつ漸進して、やっとこさ四角いブロックみたいなかたちをしたＣ４を手にする。
「やはりな。コードが切れてやがる」
周りの木々に燃えうつった爆炎に照らされる中、苦々しく呟いた。
赤い炎が銀色の金属製信管に照らされて、踊る姿にほんの少しの美しさすら感じる。その信管から?がっているはずの黒いコード。それが、若者の持っていた起爆装置と?がっているはずなのだが――
「……踏まれて擦ったときに千切れたのか?」
たぐり寄せてみた宇治の手の中にはただ無残に引きちぎられただけの切れ端が残っていた。
少し悩んだ後、Ｃ４の一端を手に取り、細く細く、こよりのようにして捩る。
暗い中だと作業がしにくいが、もう夜目にもなれてきた。
「……よし。このくらいでいいか」
燃える枝葉に導火線となったこよりのようなｃ４の端部を近づけ、少しあぶると火がついた。
最低感度のｃ４も、導火線を作ってやると爆発する事がある。宇治にはこれに賭ける他ない。

「こっちだ化け物!!」
ぎょろり。外皮のところどころから青色の血を噴きながら、怪物は宇治に目をやる。
煌煌と燃える光が、激しく前後に揺れ動きながら近づいてきている。怪物にはそのように見えた。
泥の中を走る男は、あと距離がおよそ５ｍもないところで突如立ち止まり、火のついたソレを勢いよく投げる

くるくると回転しながらｃ４は飛んでいき、その導火線の根元が燃えさかる火炎に飲まれる寸前で、べちゃり。泥か何かでも当たるくらいのきやすさで、黒い外殻に貼り付いた。
「……くっ!!」
直後、宇治の瞼を強烈な閃光が焼き尽くす。
咄嗟に伏せたはいいものの、うなじの毛がちりちりと焼けるような感覚。グローブ越しにでも感じる熱線。そして濁った泥さえも貫いて瞼のうらに突き刺さる光。
耳がきーんと遠くなる。近くでＲＰＧ―７を発射されたときよりも遙かに激烈な衝撃波が背中から胸を圧迫した。
そのとたんがぼりと空気が肺から押し出されていき、その空白を埋めるように泥水が口と鼻との両方に入り込んだ。
刺すような強い刺激が喉を突く。腐臭とも違う何か異様な痛みが鼻腔をくすぐる。
「……げほっ!」
どろりとした水滴を鼻から顎にかけてしたたらせながら宇治は顔を上げる。一度裾で顔をぬぐってから拳銃を片手に草むらから飛び出した。
勢いよく安全装置を外し、無様にも横転した黒い化け物の土手っ腹へと駆ける。歪な形に深くえぐれたその灰色の腹からは、どくどくと青白いようなよく解らない色の血液が流れ出していた。
ばたばたと闇を切るように慌ててばたつかせる前足がびちゃりと丁度宇治の方に泥を跳ね飛ばす。
降りかかった泥の塊を、手袋を填めた右手の腹で受ける。
その泥を持ち手と一緒になったストックの底に塗りたくるように右手を添え、無防備なその腹を狙って正拳突きでもってぶん殴るような格好でその拳銃を思い切り突き出した。
「喰らえ……ッ!」
ごぎり。金属の擦れるかのような鈍く嫌な音が耳朶を打った瞬間、宇治はその引き金を思い切り引き絞っていた。
絶対に外れることのない距離から、銃声が響くこともなくその破孔

へと吸い込まれる。
悲痛さすらをもかもしだした甲高い号哭が、猪の牙のように伸びた怪物の砲と砲の間。ただ昏いだけの口腔から放たれる。
何発目かもわからない弾丸が怪物の肉を貫いたのとほぼ同時に、暗闇でもはっきりと見えるくらいに目立っていた緑色の瞳は静かに打ち震えながらその光を失った。
「弾切れか」
ガチガチと引き金を繰り返し引けども、それ以上の弾は出ない。
弾倉を手のひらの中に落として、空になったことを確認。乱暴に腰のホルスターにしまい込む。
「状況、終了……」
肩で息をしながら、宇治はぽつりと呟いた。

０５＿眠る草木と

「……ここは？」
僕はひやりとした冷気を肌に感じて、目覚めた。
夜に布団がズレていて、そこから夜の寒さを感じ取ってしまったかのような。そんな寝覚めの悪い起き方。
どうやら硬いなりにもベッドの上に寝転がっているようで、先ほどの例えに直結したのはどうやらそれが原因のような気もする。
「……ん？」
よっこらせと身体を起こしたあと、そこにかすかに漂うタバコの濃密な臭いに気づいて鼻をひくつかせた。
けして隠そうともしていない人の痕跡。そんなある種の無防備さに呆れかえりながら、ここがどこなのかを推察し始めた。
「とりあえずの判断材料は……」
部屋の隅に固められるように積まれた防弾ベストと弾倉入れ。それに、無骨な銃が一挺。
全く手入れのされていない廃墟同然のコンクリートアパートの一室で、これまた清掃というモノを知らないようなベッド。むしろこういう家具が置かれていること自体がおかしいのではないかと疑ってかかりたくなる。
「……んん？」
こんこんと壁をたたいてみる。途端パラパラと白いモノがはがれ落ち、かりかりに固まったペンキらしきなにかが前腕に降り積もった。
トントンとつま先を床に打ち付ける。フローリングなんて物はみなひっ剥がされているようで、打ちっ放しのコンクリート床がどんどんと反響した。
剥き出しの鉄骨は既に錆び付いており、その下にいくつかのハンガーやらゴム紐やらがぶら下がっている。
「……とりあえず、これ以上は何もない。かな」
そっと足音を立てないように、コンクリート製の床へと飛び降り

た。ぼろぼろのパイプベッドが少したわんだ気がしたが、恐らく気のせいだろうと片づけて歩を進める。
部屋の隅に固められた防弾ベスト。そのまた上に立てかけられたウッドストックの小銃。シンプルな形で、バナナ型の弾倉が特徴的なその銃は、既に何人もの人間を射殺しているような冷徹さを孕んで銃身を煌めかせた。
そうだ。僕の名前は――
その小銃についてあったスリングに腕を通す。引き金を確認。安全装置を外して、いつでも撃てる体勢に。
「――――シグレ、征くよ」
僕は音もなく、部屋の外へと足を進めた。

「宇治さん……っ！　先ほどはすみませんでした!!」
「こいつがもう撃てって……」
「いやいや、お前だって反対しなかったじゃないか！」
Ｃ４爆薬による爆発と、拳銃の発砲によって怪物を見事倒せたことは、ちょうど砲撃被害を減らすために散開してから再集結した誘導要員たちにもわかったようだ。
「……いや、死ななかったから大丈夫だ」
それで、ベースから西へおよそ４００……先ほどの湿地帯のすぐ近くの空き地に焚き火をたいて、未帰還の人員との集結および休息をとっている。といったところだ。
「それで、今回の被害は？」
「とりあえず、今作戦参加兵員の１０名中未帰還が３。うち１は目の前で爆ぜ散りました。負傷者はほぼ全員ですが、骨折や欠損を含んだ重傷者は運良く誰もいません」
フィリピン人。とくに都市民に多いスペイン人らしきラテン系の彫りの深い顔が、そう語る。
彼は、木によすがるようにして座り込んでいた宇治の眼前の土に一挺の銃を投げ捨てるようにして置いた。

「これは――」
「これは未帰還の1人、ロドリゴの持っていた拳銃です。砲撃を喰らってミンチになった後はこれしか残りませんでした」
壮年の男は、感情のないような平坦きわまりない声色で報告する。ある意味憎しみや殺意にも似た視線。
宇治も少しばかりうろたえながら、できる限りの感情の起伏を押し殺しつつそれに答えた。
「……そうか」
ざりっ、と泥にまみれた半長靴が砂音を鳴らす。薄汚れて擦れた緑色の迷彩服の袖を揺らして、宇治は立ち上がる。
「――――恨んでいるか。俺のことを」
彼は何も答えず、静かに敬礼して踵を返した。
「Ｍｇａ　ｐｉｌａｙ！」
待て。といった意味合いの現地語。この島に来てから、宇治が初めて覚えた現地語でもあった。
「ベースに帰ったら、やることはたくさんあるぞ。まずは名簿から。だ」
「アイ、サー」
彼が木々の向こうに立ち去って行ったのを認めた宇治は、自身の傷の手当を始めた何か所もの擦り傷や切り傷は自然回復に身を任せていても何とかなるが、やぶれた鼓膜や少々痛むなどは肋骨などは何ともしようがなかった。
それが終わり次第ぱんぱんと柏手を打ち鳴らして休憩の終了と帰還準備を整えさせる。
脳裏にこびりついていた言葉をゆっくりと反芻しながら、ある程度の応急治療のすんだものを気付かれない程度にじっと凝視してみる。
Ｃ４を起爆する任をおっていた若者を含めて、少なからず宇治という異邦人に対する恐怖のような怨嗟のような感情が渦巻いてはいるようだ。
ホルスターにしまい込まれた拳銃の位置を確かめる。微妙な重さが太ももにまとわりついているが、いざというときにはこの重さのみ

しか役に立たないことを再確認。同時にぽつりと、誰にも聞かれないようにして吐き出した。

「――――必ず本国に帰り着いて見せる。……たとえ、他のすべてをこの島に埋めたとしても」

一瞬の思慮のために閉じた瞼を開く。

焚火の跡をを消す現地人の若者、髭の生えた西洋人、ほのかに暗い色の肌の男たち、そして自分。人種と主義思想のるつぼは、まるでこの国そのものの縮図のようだ。薄く口角を釣り上げて自嘲的にほくそ笑む。

ちょうどその時だ。

ほのかに太陽の昇る兆しがありそうな東の空に、ジャングルの中にうずもれるように頭だけを出している廃ビルの群れに、

「おいおい……なんだって……」

燃え上がるようなという比喩では済まされないような炎が、鮮やかな橙色が浮かび上がったのは。

０６＿嵐に踏み込め

「ベースが……燃えてる？」

誰かが、ポツリと漏らす。

この場合の出火を見てまず考え得るのは、何者か――先ほどの黒い怪物――の襲撃。

次に、ただの小火騒ぎ。

そして、〝同じ穴の狢〟によるもの。だ

「……全員、注目」

宇治はいったん地面にしゃがんで、現在の６名――大なり小なり生傷を負っている彼らを呼び集めた。各々が３０回以上もそれぞれ同士を殺し合える武器を背負った男たちは、ざりざりと半長靴で草を踏みにじり近づいてくる。

「現在、俺たちのベースから出火している」

それは見て解るな。宇治はそう前置きして、続けた。

「恐らく敵――さっきの怪物か、俺たちみたいな人間かが放火したものと思われる。――――そして、あそこには最初に黒い怪物と交戦したときの重傷者が多数いる」

一瞬、宇治をねめつける視線が密度と敵意を一気に引き上げた。気がついていないような振りをして、更に言葉を吐き出す。

「さて、俺たちはどうする。――重傷者を助けに行くか、それとも否か。だ」

「もちろん、あのベースを捨ててどこか他の地に行くというのも構わない。各個人の自由意志にゆだねよう」

つまりは、今この現状で逃げ出しても罪には問わない。と言うことだ。

「もともとの組織がどんな事をやっていたのかは解らない。ただ、鼻つまみ者の多いこの組織においてこの組織自体がお前たちの存在価値たり得るものだったと言うことは、重々理解している。……ここ、フィリピンという国家が既に機能していない以上、ここで逃げ出しても捕縛される危険性はない。フィリピンの軍も警察も、日本軍

も恐らく組織的な抵抗を試みることができないまでには機能していない」
だから、人殺しを行っても裁く者はいない。暗にそう伝えているのだとわかって、数名の男が不快感を隠そうともせずに眉間にしわを寄せた。
「……サー。俺たちが人一人撃てないような甘ちゃんだというので？」
先ほど報告に来た男が、強い不快感をその顔立ちによりいっそう込めながら吐き捨てる。
いいや、そうではない。と首を静かに横に振ると、ホルスターから拳銃を抜き取ると、おもむろに皆に見えるような地べたに置いた。
「現在、俺たちを守れるものはこれしかない。対話による平和的解決が望めないとするならば、人殺しをも視野に入れていかねばならない」
拳銃。暴力の象徴である黒い鋼色の機械は、宇治の掌の中で弄ばれる。周りの男たちは顔を見合わせて各々でそうだな。と首肯し始めた。
「もしもあの襲撃が他の人間の手によるものだとしたら、同じ血の通った、同じ言葉を操る民族だとしたら、敵をためらいなく射殺できるか？」
先ほどの男すらも、口ごもる。それを見て立ち上がり、あたりをぐるりと見渡してから発言した。
「先ほども言ったが、別に逃げ出すのは咎めない。各個人の自由意志を尊重しよう」
ただ。宇治はおもむろに言葉を繋げる。
「以前の組織ではなく〝俺たち〟で働く心意気があるという奴は、今まで以上にこき使われることを覚悟しておけ。代わりに居場所くらいは作ってやる」
そう言うと、宇治は拳銃を腰だめに構えてジャングルの向こうへ。ベースの方角へと歩き出した。対して、焚き火のすぐ側に残された男たちは顔を見合わせて、どうするかを考える。

そして、めいめいに己の思う方角へと進んでいった。

ベースまで、およそ２００といったところか。宇治は一人、静かな森の中で呟いた。

一晩中、黒い怪物と戦い通してもう体力も限界に近い。夜が明けるまでにはベースを取り戻すかどうにかして眠りたいものだ。

木の根っこを踏み外して、ぐらりと上体が揺れる。はっと腐葉土の土を踏みしめてバランスを保つ。ぐじゅりと水分を含んだ土が鳴いた。

先ほどはあんな啖呵を切ったが、結局誰もついて来なければ一人では何も出来ない。何だってあんな演説まがいのことをやらかしたのか。

疲れから朦朧とする意識の中、何かを考えて何かを反省する。それすらも記憶から抜け落ちていく。

これではマズいとまだ冷静な心が諭す。懐から丸薬タイプの錠剤を一錠、月明かりが出ているかどうかさえ解らないほど暗い森の中で探し当て、それを口に含んだ。

「ぐっ……」

一気に脳に酸素が行き渡る感覚。直後に手足が少しだけ軽くなったように感じて、周囲が広く鮮明に見えてきはじめる。

１番肝心な多幸感は、１番最後にやってきた。少しだけ目が冴えてきて、もしも昼なら鼻歌でも歌ってピクニックにいけるほどのテンションまで持ち直すことができた。

「流石にこれは、異常だとは思うがな……」

そう悲しげに呟いた瞬間、宇治の耳が何かを聞きとがめる。

ぴくりと耳自体が動くような錯覚を覚えて、その物音が継続的に、定期的に鳴っていることに気付いた。

それは、ざっざかと腐葉土を踏みしめる革靴の音にそっくり。足音の数はおおよそ6。それだけで、宇治にとっては何がそんな音を後ろから発しているのかが解った。

「……そうか」

宇治の後ろについた、老若問わない男達。
濃緑色のピクセルカモ、薄茶色の作業服、そして森林迷彩の戦闘服。
各々の袖を揺らして、銃を支えながら歩を揃える。
全部で7人の男たちは、足並みをぴたりと揃えて道なき道を歩んでいった

07＿警報装置

息が苦しい

じわりと鉄の味が広がる口腔の中をなめ回した宇治は、ごほりと草むらめがけて咽せ混んだ。

「……大丈夫だ」

真っ黒の手袋で口元をぬぐって、残った左の拳で拳銃をぎゅっと握りしめる。ガンパウダーのおかげか、少ししたら喉の痛みは痺れて消えていった。

応急で処置をしたとはいえいまだに塞ぎきっていない生傷が開いて、じわりと赤黒い血液をにじませる。

薬を投与したとはいえ、もう体力も限界に近いな。ベースのある山の中腹までの獣道でそう分析して、とたんにせり上がってきた鈍痛にこらえきれず、再度咳き込む。大丈夫かと覗き込んできた青年を鬱陶しそうに振り払ってから言った。

「もうじき『ベース』、俺達が数時間前に出て行った道路。大路につく……まずはその付近の警報装置が外れているかを調査しろ」

了解。片や勢いよく、片やその勢いに流されるようにして頷いたあと、男たちが方々に分かれる。獣道から外れて、鋭く尖った稲のような雑草たちがひしめく雑木林の中へ。

それを確認した上でただ一人、拳銃を片手に獣道を上りきった宇治は、手頃な草むらの中にしゃがんで『ベース』の方を、天を焼くような炎のせいかそれとものぼり始めた太陽のせいかほのかに明け白んだ空を睨みつける。

ここはベースと密林の境界線。アスファルトがひび割れ、その隙間から伸びた細長く尖った雑草が点々と続く古い道路。車一台ぐらいなら容易く通れるほどの舗装された小道が、真ん中からひん曲がった〝通行止め〟の標識を境にして苔むした叢林の中に消えていっている。

まるで、自然と文明との境界線のようだ。人が住まうには余りも厳しい密林と、仮にも昔人が暮らしていた廃墟。こんな頽廃的な情景で

さえ、この島より遠く北方。祖国の廃墟マニアとされる人々には垂涎の的なのだろうか。トルエン系の興奮物質のためか異常なほどに明るく澄んだ思考のまま、脳裏に言葉を投げかけていっては消していく。

「指揮官（コマンダンテ）。警報装置には異常、ありません」

「なんだって？」

がさがさと藪の中を食い破るようにして現れた若いフィリピン系の男が、声を低めて告げる。

拍子抜けして思わず、この国で伝わるはずのない日本語で返してしまった宇治は、ぽかんとした彼に対し改めて問い返す。

「一体どういうことだ？」

「どうもこうも、外から侵入された形跡がない。と言うことですよ、指揮官殿」

西洋人系の、彫りの深い顔をした男が草むらの奥からあらわれた。

「他の人員も同じです。俺が確認した限りでは、一カ所たりともワイヤーの破損などは認められませんでした」

ワイヤー式の簡易な警報装置。地雷にも鳴子にも？がっていないというのが資金も素材もない非正規部隊らしいところではあるが、それでも脚か何かに引っかければ作動するくらいの信頼性はある。それが何処にもなかったということは――――

「本当に、小火騒ぎなのか？」

おそらくは。西洋人系の男は静かに首肯した。

これがただの、内部出火による小火騒ぎと分かってしまえば話は早い……だが、ベースにはまだ負傷者達が残っていたはず。彼らに何の動きもなさそうに見えるのがまた怖い。

ざらざらとした無精髭を左の黒い手袋越しに弄り倒しながら、着々と集まる報告を聞く。話されているのはみな英語かタガログ語だが、その風貌は多種多様だ。

「宇治さん。ワイヤーに異常は……ありません」

最後に宇治の元にたどり着いた男、起爆係だった青年が小銃を片手に告げる。そうか。宇治はぽつりとつぶやき、ご苦労だったなと小さ

く返した。
ですが、青年がどこか迷ったような眼差しで見つめる。いくらかの逡巡を見せた後、意を決したように口を開く。
「あの……警報装置の確認がてらベースの一角まで近付いてみたんですけれど、そこで妙な音が」
妙な音？　真っ向から疑うような目線を向けられた青年は少したじろいだが、きっと見返して頷く。
「はい。ガスが連続して炸裂するような……圧縮された空気の音。と言いますか……」
一体何が言いたいんだ。宇治はそう溜息交じりに返そうとして、ふと自分の愛銃のことが思い浮かんだ。
ＡＫＳ（クリンコフ）―７４Ｕ。愛銃と称するのは些か扱ってきた時間が短いようだが、それでも黒い怪物との戦闘をはじめ、幾度となく命を救ってきたやつだ。
誰の趣味だか、本来ＡＫ（アサルトライフル）―７４には似合わないはずのサプレッサーに、ラッパか漏斗みたいな形のフラッシュハイダーを組み合わせたよく解らないモデル。ロシアかアフガンかのテロリストも愛用していたという銃を、あの日宇治は手に取った
「……」
顎髭にぞりと触れる。酒から醒めた時みたいな、嫌に冴え渡った脳みそをフルに使う。
圧搾ガスのような音。それが、もし仮に、自身の使っていた銃のものならば。みすみす空き巣に入られ、あまつさえ銃を鹵獲されるなんて恥の多いことをしてしまったのならば。それがこの組織の崩壊を意味するのならば。
――その罪を背負うのは自分である。
「よし、わかった」
ポツリと漏れ出した言葉の続きを、男たちは固唾を飲んで見守る。一挙一動たりとも見逃すまいとする幾条もの視線に突き刺されるような、妙な緊張が走った。
「……一旦、ここで分隊を分ける」

は？　唖然とする男たちを尻目に起爆係だった青年と西洋人系の男を指さし、続いて残った４人を指示して告げる。
「お前とお前の２人は消火。そこのおまえら４人は負傷者を救いに行け」
「宇治さんは？」
決まっているだろう。
精一杯の強がりを表情筋に込め、無理やり頬を吊り上げさせる。手持ちは心もとない拳銃一丁。敵は何人かわからない上にアサルトライフルを持っていかれているかもしれない。
だが、あんな黒い怪物ども相手じゃなければどうとだってできる。内心で決意して、立ち上がった。
「俺一人で、襲撃者をやる」

０８＿誰何の夜を

「散開しろ」

薄らと紅く焼けてきた空の下、宇治はひとりブッシュと廃ビルの間隙を駆ける。

地面に這いずるようにして薄く広がった朝もやの中、足元に細く、ぴんと張り詰めて引き伸ばされたワイヤーを認めて、上体を低くした上でその場に立ち止まる。前傾気味だった体勢をまっすぐに伸ばされたおかげか、前のめりに転げまわりそうになりながらも足に力をこめて踏ん張った。太ももにできた擦り傷、裂傷の類からジワリと体温が流れ落ちた。

こんなものが足元に張り巡らされていると判らなければ、すっ転ぶやつが多発しそうだな。痛みからのがれるように益体もない考え事に手を伸ばし、頭を振ってきっと前を見据える。

ワイヤーに引っかからないよう気をつけて、軍靴の分厚い踵をひび割れたアスファルトに叩きつける。開いた生傷に歯を食いしばる。ぐぎっと、蛙が踏みつぶされたときのような苦く鉄臭い音が自分の喉の奥から漏れ出したのが分かってしまって、どこからともなく湧いた恥ずかしさを隠すべく唇を真一文字にひき結んだ。

「……クリア」

廃ビルの前を横切るときにざっと銃を向けて確認し、敵がいないことを確認する。

大路から青年が言っていた場所までは、直線でおよそ１００ｍと少し。比較的老朽化が進んでいないビルのうちの一つだと思われる。

奇しくも、宇治の居室。いや、寝床があった建物だ。

こりゃ本当に鹵獲されてるかも分からんな。チッと舌打ちして、ビルとビルの間。小さな路地裏をクリアリング。誰もいないことを確認すると、件の建物を目指して雑草の生えたアスファルトを踏みしめる。

少し走ると、また大きな通りに出た。もう数軒の廃ビルを過ぎれば、そこはもう目的の建物。びゅうと一際風が強くなったような気が

して目を細めた。
「……っ」
灯火。ビルとビルの隙間から、どこか暖かみのようなものを感じる橙色が網膜にうつる。
目をこらす。四辻に小さくはあるがかがり火が焚かれているのを目にとると、宇治は手頃な建物の影に隠れた。
ちょうどよくあった苔の生えた室外機のそばに膝をつき、廃ビルの間を通り抜ける風の群れに耳を澄ます。
枚を銜んで、聞き耳をたてる。拳銃を握る手がじわりと汗で滲んだような、気がした。
ぱちりと薪のはじけ飛ぶ音。がさがさと遠くの森がなく音。自分の心音まで、聞こえてくるような気がする。ごくりと、唾を嚥下した。
「……足音」
細かいじゃりが、アスファルトと靴底の間で鳴いた音。聞き入れた瞬間ばっと体勢を立て直す。
パチリとセーフティーを引き下げ、身構えた。近い。
息を呑む。砂が鳴く。血液が沸騰する。足音が近づくのが分かった。
ざり。ざりと足音は近付く。そのたびにどくりと血液は踊る。
心臓を口から丸ごと吐き出しそうなほどの緊張に、俄然血管が高鳴った。
向こうが近付いているなら――こちらから脅しをかけてやるだけだ。心に決め、薄く口角を引き伸ばして脚に力を込める。
――ざり。音の一瞬の間隙を縫って、溜めていたバネを思い切り解き放つように、飛び出した。
「――誰だ!」
「――誰!?」
人影の眉間に銃口を向ける。
影から伸びた筒先がこちらをぴたりと狙いすます。
宇治と、人影。かがり火と黎明の日差しを背にしたおかげか、真っ黒い服も相まって人型の影にしか見えないそれとが、どちらも互いに

動くことなく黙りこくって見つめ合う。
幾分か経ったように感じたとき、ビルの谷間を一際強い吹き下ろしが駆け抜けていって、二人の間の沈黙を流していった。
「銃を下ろせ」
ぽつりと影に向かって吐き捨てる。まるで怨嗟のような低く、どろりとしたしゃがれ声になってしまったが、構わずに銃を擬した黒い闇を見据えた。
「……僕のほうこそ下ろして欲しいけど」
はあ。呆れたようなため息と、多少はやめの心音が聞こえてくるくらいの距離感。言葉尻が震えるわけでもなく、多少の緊張しか見当たらない。
「女か」
「……それで、いつになったら銃を下ろしてくれるのかな？」
人影は宇治の問いかけを無視し、男にしては高いメゾソプラノでもって尋ねた。
其方が下ろさない限りには下ろせないな。どこか嘲るような声色を作る。こういう状況になったら、もう何かの機会に殺すか殺されるかの早撃ち合戦が始まる。それしか起こりえないことは、宇治がよく解っていた。
「……まあいいさ、僕が折れてあげる」
宇治の胸に突きつけられていた銃が、ふいと右にずれて地面を向いた。
同じようにして銃口をそらした宇治に、人影は語る。
「それで、君は誰？　なんでこんなところに？」
「それは……こちらのセリフだ」
口を割ってくれる事はないか。人影はやれやれと肩をすくめ、ふうとため息をついて向き直る。
「爆発音と銃声、それとあと足音が聞こえてきたからね。これは近いなと思って見回りに来たんだ」
「なるほど、それは仕事熱心なことだ」
宇治は左手で顎鬚を弄び、人影を凝視した。

黒く、闇に溶けるような長袖に同じような色合いのフード。暗く影に隠れた手に握られるのは、切り詰められた銃身の特徴的な自動小銃――どこかで、いやあの時見たまま泥に薄汚れた木製のハンドガード。

どちらともなく、ごくりと唾を飲み込み喉を鳴らす。

ぱちり。篝火が小さく火の粉を散らす。

「……ともかく。僕は話したよ、だから教えて貰いたいな」

沈黙に負けたように、人影は耳障りの悪いメゾソプラノで言葉をつむいだ。

君が誰で、どこから来て、なんでこんな所に居るのか。一言一言を小さく区切り、分かり易いように話す人影の一挙手一投足に注視しながら、宇治は口を開く。

その手に、手汗と泥にまみれたその手袋の中に拳銃を思い切り握りしめて。

「ご親切にどうも、侵入者さんよ」

宇治の右腕が真っ黒に影の差した顔面にむかって突きつけられ――、それは一瞬の躊躇いもなく火を噴いた。